

「ぐんま教育の つどい2021」補遺

前橋清陵高校 夜間部教諭
東海林（近藤）聖弥

〈自肅要請〉に感じた恐怖

【自肅】 じしゅく：〔名〕自分から進んで行ないや態度をつつしむこと。

【要請】 ようせい：〔名〕①（一する）必要な事柄を、その実現のために願い出て求めること。

②（一する）必要とすること。要求。（後略）
『日本国語大辞典』より引用

日本政府の立場は一貫して、新型コロナウイルスの蔓延防止のため、国民に対して自肅を要請してきた。〈自肅要請〉とは、語義としてやや怪しい使い回しであるが、大きな抵抗もなく人々に受け入れられた。これに対し、欧米諸国は必要な諸法制を直ちに整え、罰則を伴う外出禁止令を発令、その様子は“ロックダウン（都市封鎖）”と形容された。個人の主権の拡充・保障に長い歴史と議論を重ねてきた欧米諸国にとって「主権の制限を伴う厳しい措置」は、その政治首脳部の本気度を伺わせるに十分なものである。

日本政府は「“ロックダウン（都市封鎖）”を可能とする法的根拠がない」という立場を取り、よって〈自肅要請〉という非常にあいまいな、しかし同時に日本らしい政治判断を下した。「自肅はあくまで個人の問題、要請には法的拘束力はなく、われわれ政府は国民に対して、感染拡大防止を『お願い』しているのである。」これではまるで、戦争に協力しなかった人たちを指して「非国民」と呼ばわった言説構造の繰り返しではないだろうか。事実、「自肅警察」という造語とその現象がテレビで取り上げられ、やり場のない不安と膨れ上がったいびつな正義感が、（自分とは異質な）他者を排除していく方向へと動いてゆく。

それと同時に〈自肅要請〉は、その政治判断

に伴う責任の所在をあいまいにさせる。コロナウイルスの感染拡大は、「あなたたち国民の努力次第」で抑えられる—したがって、感染拡大を止められないのは、国民の努力が足りないからだ、ということも含意する—のだ。

不安の渦の中で、一人、考える。今できることは〈考えることを止めないこと〉。大人たちが振り回され、何もできない状態でうろたえて、子どもたちは何を考えるだろう？

学校論再考

安倍前首相による全国の小中高校に対する臨時休校の要請は、その科学的な効果については検証する必要があるが、その政治的な効果は（財政出動という意味でも）非常に有効だった（コストパフォーマンスが良かった）ように思える。「学校が休校になる」というインパクトは、我々が想像していたよりも大きく、社会経済活動の大きな停滞を招いた。

こうして始まった、学校をめぐる議論のうねりは、今後の学校論・教育論のスタンダードとなると予感する。今回のつどいでも、村上先生が勉強のモチベーションの保ち方について言及されていたが、まさに今、〈学校で勉強すること〉の意味が問われている。

なぜ勉強をしないといけないの？学校って何をするといい？授業は学校でやらなきゃだめ？今やっている授業は将来、具体的にどのような役に立つの？噴出する疑問に、我々教員はすぐに、もっともらしい〈答え〉を示そうとする。そもそも、教師が〈教える〉こととは何だろうか？問い始めたら終わらない、これはアポリアである。

研究活動と教育現場は 二足の草鞋か？

私は今、研究活動として戦国期上野国（現群馬県域）に関する調査・報告を行っている。戦国時代と聞くと、常に戦争が続く不安定な時代だと想像するかもしれない。しかし実情は、（列島を覆う）統一的権力の不在によって地域権力が常に再編成される動乱の時代と言え、常に戦

争が続くのは列島全体というよりは、(権力間の境目における)局所的な場面である。

戦国期の上野国地域は、(現在にも通じるが)各交通路が交差する重要拠点であった。上野国からは、英雄と呼べる著名な戦国大名が生まれなかったが、それは裏を返せば、安定的な領国経営が難しい、激動の地域(権力間の境目)であったと言える。上野国には、さまざまな文化・物資・人物が行き交い、活発な経済活動・軍事行動が展開された。上杉・武田・北条氏という巨大な領域権力(いわゆる戦国大名)が、競ってこの上野国に侵入しては後退する、ということを繰り返したのは、上野国の重要性を物語る。

地域に残されたわずかな痕跡から歴史を組み立てる作業は、何にも換えがたい独特の知的喜びがある。あたかも推理小説に登場する探偵か、はたまた法廷における検察官・弁護士かの役割を演じるような、そんな気分させるものがある。

歴史学者は、史資料を根拠に、歴史像を組み立てる。その歴史像は常に仮説であるが、より“確からしい”情報をもとに判断し、組み立ててゆく。授業でここまで行き着くことは難しい。ただ、この仮説を組み立ててゆく過程においては、1)調査等で得られた知識・技能を用いて、2)「何をもって“確からしい”とするのか?」「選んだ史資料は適切であるか?」ということを思考・判断し、そのことを文章等で表現して、3)学界という共同体において、協働的・主体的に、かつ多様な見解を取り入れながら、より“確からしい”歴史像について議論を深めてゆく、(どこかで見たことがあるような)そういった一連の作業を必要とする。

生徒が授業において、「楽しい!」と感じることのできるものは何だろう?生涯学習につながるような、知的喜びを感じさせる仕掛けは何だろう?そんなことを、毎時間考える。時には授業を大きく脱線しつつ、常に軌道修正をしながら、これも作業仮説のままである。よって、良い意味でも悪い意味でも、同じ授業は二度とできない。私は、生徒の顔を見ながら授業の流れを決めるスタイルに、楽しさを感じている。今の自分の実力では、研究活動と教育現場が(全

てではないが)乖離していて、もどかしさを感じている。二足の草鞋という諷刺を免れることは難しいだろう。両者を統合して、よりよい授業を目指したいというのが、今のスタート地点である。

交流の力 対面の力

今回、「ぐんま教育のつどい 2021」に参加させていただいて、対面による交流の力を強く感じた。村上先生や悴田先生が自分の高校の生徒の話をするときの楽しそうな優しい表情、多賀谷先生の渾身の?親父ギャグ!を含めた独特の話の間合い、千明先生の生徒の将来に対する熱い思いなどなど。対面して五感で感じて、初めて共有できる空間がある。これは学校の授業でも同じである。オンラインという手段が出てきて、改めて気付かされた。もちろん、オンラインにも強みがある。時間と場所を問わず、パソコンの前に居ながらにして、より広い世界を相手にやりとりができるのだ。

多賀谷先生がおっしゃった、オンラインで「笑い」を伝えることの難しさ。これはハード面の技術的な部分を乗り越えたとしてもなお、変わらないのだろうと思う。苦しいとき、不安なとき、辛いとき、悲しいとき、「笑い」が持つ力は計り知れないものがある。「笑い」を共有できる交流の力、対面の力に強い希望を持ちながら、オンラインという新しい手法を取り入れていこうと思う。

教員の仕事とは・・・

人を内的に支配するには、“不安”を煽るのが政治の常道だ。不安は目に見えず、知らないうちに忍び寄る。ひとたび不安に飲み込まれれば、そこから脱出するのは容易なことではない。私たち教員は、生徒たちの不安に寄り添い、生徒たちが不安に飲み込まれないよう支援するのが仕事だと思っている。一人でも多くの生徒の声に寄り添える力を身につけたい。そのための手段の選択肢は、多い方が良い。

(編集註:筆者は、先日結婚されて東海林(しょうじ)聖弥さんとなり、年度末異動により現任校は高崎商業高校となりました。)